

中学生連載企画

私たちのふるさと松山学 No.31

北条南中学校

俳人高浜虚子をつくくる土台となった故郷「西ノ下」

高浜虚子は生まれて間もないころから約7年間、当時の風早郡別府村西ノ下(現・松山市柳原)で育ちました。そこで、「西ノ下」とはどのような場所か、虚子にどのような影響を与えたのか、夏休みを使って調べてみました。

西ノ下で暮らすようになった経緯

虚子一家は、もともと松山城下に住んでいました。が、虚子の父が政府から、

家禄奉還金としてもらった禄券を懐にして城下から三里半ほど離れた田舎西ノ下に居を移しました。その場所、虚子の父は、農業に従事するつもりで、自ら鋤

をとっていたそうです。しかし、虚子が物心つく前の幼いころに、青年であつた3人の兄たちは農業を好まず、間もなく松山に舞い戻りました。そして、7年間、鋤をとっていた父もついに幼い虚子を連れて城下に戻りました。

記しています。西ノ下の自然豊かな風景は、虚子のもので見方、感じ方の根本となりました。

西ノ下で培ったものを「花鳥諷詠」へ

花鳥諷詠は、1927年に虚子が主唱した俳句作法上の理念で、虚子が行った俳人としての活動の中で最も大きなものと言えます。



花鳥諷詠とは、人事も含めた自然現象をよく見て、その感動を整った調子で詠むことです。

幼いころに見た、美しい瀬戸内海や行き交う小さな船、草木が生い茂った周囲の山々、父の畑など全てが虚子の原風景となつていて、西ノ下で育つたために花鳥諷詠が考え出されたのではないかと思えます。

西ノ下への思い入れの強さが伝わる俳句

此松の下に休めば露の我
虚子が43歳の時に西ノ下に戻った際に詠んだ句。



当時の西ノ下の様子

父らと共に帰農した西ノ下には、同じように帰農した4軒の家が並んでいた。海上にある干切、小鹿島、それから鹿島。陸地には、恵良、腰折、高縄、おんご、めんご等の山々。其等は皆私の幼な友達である。県道の松並木、そのほとりの部落、電信棒、大川の土橋、大土師堂、その傍にある大松。」(「虚子自伝」)

一八七四(明治七)年	淡明で生まれ、松原の西ノ下に移り住む。
一八八一(一四)年	再び城下に移り住む。
一八八八(二二)年	伊予尋常中学校に入學する。
一八九二(二六)年	正岡子規が、虚子の号を授かる。
一八九五(二九)年	現在の京都大学に入學する。
一八九七(三一)年	松原松島が子規らとともに松山で「ほととぎす」を創刊する。
一九〇〇(三四)年	「ほととぎす」を引き継ぎ、東京に移転する。
一九〇〇(三四)年	「ほととぎす」として再出版させる。
一九〇五(三九)年	「ほととぎす」に漱石の「五言詩は猫である」の連載を開始する。
一九〇七(四一)年	小説家として有名になる。
一九一三(一七)年	「虚子はなれた俳句の世界に再び居ることを決意する。」
一九一七(二二)年	北松の下に行けは露の我
一九二八(昭和三)年	俳句は自然を詠むことだと考えを固める。
一九三六(一〇)年	「ほととぎす」五〇〇部
一九四七(二二)年	父を恋ふ心小春の日に似たる
一九五四(二九)年	父の、を恋う涙がある。(本天宮の受けて生まれた)
一九五九(三四年)年	俳人として初めて文化勲章を受取る。
一九八〇(四五)年	四月八日七くなる。(85歳)
	「ほととぎす」一〇〇〇部



校内に飾られている虚子が書いたとされる書

ここにまた

住まばやと思ふ春の暮
虚子が66歳の時に、父の50回忌に住居跡を訪ね詠んだ句。虚子はまた西ノ下で暮らしたいと願っていました。



(左から) 阪本こゆずさん、山本莉里さん、玉井色葉さん(3年)

調べてみて

今まであまり知らなかった高浜虚子について調べてみると、私たちが住む北条に縁のある人だとかかりました。実際に虚子を書いたとされるものや、句碑が残っているの、皆さんにも知ってもらいたいです。



虚子の胸像と句碑が建てられている西ノ下大師堂

好きな虚子の俳句



平成28年4月に開始した中学生連載企画が2巡目に入りました。これまでの連載記事は松山市ホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。



二次元コード